



JAPAN URBAN DESIGN  
INSTITUTE

## 都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷 2-35-10

本郷駅前ビル 113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

# JUDI NEWS

028 JANUARY 20.  
1996

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集／「都市環境デザイン会議 85-95」

——都市環境デザイン会議の活動を

振りかえって——

JUDI 設立の経緯 ······ 1

これまでの活動を振りかえって ······ 6

各デザイン分野からの都市環境

デザインへのアプローチ ······ 7

都市空間をどのように捉えるか ······ 11

都市環境デザインを行うに

あたって心したいこと ······ 16

●選挙管理委員会公告 ······ 18

●ブロック例会レポート

北陸ブロック ······ 19

四国ブロック ······ 19

関東ブロック ······ 20

●事務局より ······ 20

●編集後記 ······ 20

える立場にいます。そこに関わる人達、つまり物を作っている人達の、「都市のあるべき姿をどのように考えていったら良いのかわからないし、どんな物を作っていましたら良いのかわからない」という声を聞いたのがそもそもその出発点でした。また、物をつくる業界というのは、その業界でまとまっているもので、照明業界は照明業界で、舗装業界は舗装業界、ベンチやごみ箱の業界はその業界でというように、同じ都市を舞台に物を作っている者でありながら異業種間の交流がほとんどない。これではいつまでたっても部分止まりだという感じを持っていました。ならば、皆で話しあえる機会というか、場をつくったら良いではないか、そして、企業の立場ばかりで話し合っていても埒があかない。具体的に都市に関わっている立場の方の話も聞きたいということになり、車の車輪…物を作る集団とものを創作する集団とでいろんな話ができる集まりをつくれないか、と考えたわけです。ものを創作する集団と一緒に言で言っても、その専門は、私のような工作物を設計する者から、照明を対象にしている方、色彩、音というように細かく分かれていますよね。そういった方達とも意思の疎通が必要であろうという自問自答の末、南條さんに話を持っていましたところ、岸井さんが同じようなことに興味を持っているらしいというので、岸井さんにお会いし、加藤さんにお会いしたというわけです。それが確か1987年の秋頃だと思います。そこで話しが膨らみ、もっと様々なジャンルの人々に参加してもらい、地方で熱心に運動している方にも持ちかけようということになり、大阪の鳴海さんや大塚さんに協力をお願ひしました。

初期のメンバーが10人を越えるようになり、集まりの名称をということで、「都市環境デザインを考える会」の名を掲げたのが1988年6月。その後、セミナー等を開き、「都市環境デザイン」という言葉やその意義を広めつつ、それに携わる人々にアンケートを行い、議論を重ねて、「都市環境デザイン会議」と名称をあらため、1991年5月11日、霞が関ビルの東海大学交友会館にて発足会が行われたわけですよね。この間、ほんとうにたくさんのことを議論しましたね。そのあたりのことはこれから皆さんが話されると思います。ざっとこんなところでしょうか。

—— 基本的には一番古いルーツの部分ですね。では、加藤さん。西沢さんから相談を持ちかけられて、その後どうしたんですか。

加藤 この件で私にとっての一番のきっかけは、建設省の都市局に何かの用事で行って、たまたま岸井さんの前を通ったら「加藤さん、ちょっと」と言われて、そのときの用件は、ちょうど西沢さんが名古屋でパブリック・デザイン・フェアの仕掛けをいろいろやっている時期でシンポジウムか何かをやったでしょう。

西沢 名古屋ですね。

加藤 ええ。それのパネリストになれと岸井さ

んに言われて、それで私は初めてデザイン・フェアのことを知ったのですけれども、そのときの私の問題意識は、そういうのもいいけれども、いま非常にヤバいということを言ったわけです。ヤバいというのは、先ほどの西沢さんのお話で言えば、自治体がエレメントに無茶苦茶お金を使い始めて二、三年たっていて、やたら目立つようになってきていて、どれもこれも水準が高くなないなという思いが一つです。それとは別に、以前からずっと思っていたのですが、私の仕事からして、いろいろな人とコラボレーション（協働）を必要としていたわけです。それで、「デザイン・フェアのここはよくわかりましたけど、私はこのようなことを考えていろいろ心配している」という話を岸井さんに言って、「では、そういうことも真剣に考えましょうか」ということになって、西沢さんと私を結んでくれたわけです。その後、南條さんが加わっていただいて、そんな順番でしたけれども、とにかくスタートは私にとってはそれが一番のきっかけでしたね。

それで、本題ですけれども、こういう会をつくらなければいけないんじゃないかという問題意識はいま申し上げたエレメントのデザイン水準の向上と関係分野の人達のコラボレーション2点ですね。

南條 私、西沢さんからそんなことを相談されたかな、あまり記憶には残っていませんが……。自分ごとを言うと、基本的に都市はトータルにはデザインできないという結論に非常に早くに達していました。部分部分のデザインはどんどんできていくわけですが、都市は結果として、デザインされたものの集合体にしかならない。そして縦割り社会というものが厳然と存在していて、それぞれの業界の個別のデザインというものしか無い。しかし、場のデザインというのが無いと私たちは気持ちのいい環境に暮らせない。たまたま領域を広くもらったデザイナーがその中で自らコラボレーションチームを選んで何かやるということはできるのですが、それだけが本当にアーバンデザインをする機会なのだろうかという思いがあります。いわゆるデザイナーがデザインをするというセンスでのアーバンデザインではなくて、空間づくりの約束事を決めて多くの人が参加する‘まちデザイン’、いま加藤さんがおっしゃったコラボレ型とは少し違うところが基本にあったわけです。

#### ●職域が定かでないのに職能団体はない？

しかし、社会的に見ると、そのようなことを認める体制がないんです。そんなことにだれも金を出してくれない。体制がないということは職域がない。これはプロフェッショナルとして成り立たないということですから、職能団体をつくることもできない。明らかですよね。したがって、JUDIの活動としては都市事業を行う際にはこうした場づくりのトータル・デザインでやっていこうということを社会的に広めることができることが運動としてまず必要だ。だから任意団体でやるしかないという極めて明快な論理が働いていたと思います。その

面では、JUDIがこれまで活動をやってきたのは正解じゃないかという気がするのです。

—— 当初、準備段階で、職能団体をつくりたいという意向が強くあって……。



加藤 全然違いますよ。土田さんはある意味ではあのときは誤解していたし、もう一つ、一番最初に麹町会館でやったときに非常に印象に残っているのは、あのとき集まってくれた約50の方に順番に発言していってもらったんだけど、篠原さんは「職能団体になれ」という発言をされたんです。それは全然違うと思いましたね、私の思いは。そんなつもりは全然ない。

それはなぜかというと、さっきのような背景がありましたから。だから、職能団体意識はなかったですね。

篠原 ずい分前のことだからよく覚えていませんが、ボランティア的な運動体でやっていたのは長づきしない。参加するからには会員に何かメリットがなければ続かないわけで。それで、いざれは「職能団体」に、と言ったような気がします。

南條 ただ、個別のデザインからアーバンデザインへ、みたいな話をして運動していくうといつても、そういう視点というのはごく一部の人しか持っていないかったと思うのです。ところが、それぞれのデザイン領域で皆さんが何かの壁にぶつかっている感じというのは、全国的に、潜在的意識としてはそういう想いがあったから、何となく参加してみようかなという反応が出てきたのではないかという気がするのです。したがって、そのこと自体を確認していく作業が設立当初の非常に大事なポイントじゃないかと思うのです。

—— ですが、都市づくりパブリック・デザイン・センター(UDC)との関係があって、景観素材業界というのが社会的に結構組織化されてきている中で、言うならば、デザインを指導する立場の専門家も集まつもらいたいというような一種の思惑がどこかにあって……。

加藤 ちょっとそこを補足させてもらうと、土田さんがそういう思いを持ったのは明らかに誤解だったのですけど、UDCの設立よりもJUDIの設立の方が先に動いたんです。私たちがそういう動きをしている中で、建設行政の方でもUDC的ないまの景観素材メーカー筋を組織化しなければということでそういう組織が急速つくられるわけです。

それで、後からスタートしたにもかかわらず、

いろいろな社会情勢の中でそれが先につくられたことになった。私は、個人的には意見を述べたりしたことあったが、そういうのとは一切関係ない。基本的にそのときのスタンスは、さっきのようなデザイナー間のコラボレーションとか、もうちょっとデザイン水準を上げようということであって、だから、職能団体という意識は私の頭の中にはゼロでしたね。

西沢 UDCをつくったときは、都市環境デザイン会議をつくるという話とたしかに若干オーバーラップしているんだけど、そのときも決して職能団体ということではなくて、純粋に、われわれは何をしなければならないかという単純な疑問から、都市デザインにかかわる専門家たちにいろいろ話を聞きたいと。だけど、そういう人たちはどこで何をしているのかさっぱりわからないというようなところから発想されたんですよね。

ですから、職能団体ということは特にあったわけではありません。

南條 私の場合は完全に逆転していて、いまのところは体制がないのだから職域もない。したがって、職能団体ではあり得ないから運動体にしていく。逆に、もしこの運動が奏功した場合には、いろいろなところから声が挙がって、その体制づくりをどうするかという議論につながっていくのであれば、それはそれで意味があるかなというふうに思っていたのです。今回の徳島などを見ても、その確認作業をブロック活動で始めるということは正解だったのじゃないかという気がするのです。

#### ●一つの柱は分野をこえての交流とコラボレーション

加藤 準備会の段階で、双方向のニュースレターを出したわけですが、あれは土田さんのアイデアだったと思いますけれども、準備会世話役みたいな人が最初の五、六人から十数人に広がったわけです。そのときに双方のニュースレターを出したり、1回目は麹町会館で50人の人に集まってもらって、こういうことをやろうとしているんだけどということで、きょう、ここにいらっしゃる皆さんとか、こういうことに関心がある、それから働いてもらわなければいけないなと思う人に手紙を出して集まつていただいたんです。

—— ずいぶん集まつてくれましたね。

加藤 それで、2回目か3回目の準備会をやった後、残っていた人たちがまず1,000円ずつ出して、まず金をつくろうと。そこで、これで本物になりそうだなという思いがありましたね。そのときは土田さんはもう入っていたから、それぐらいから本格的に双方向のニュースレターでいった方がいいんじゃないかというので本格的にやって全国的に広がっていった。いまのJUDIニュースの前段階に位置づけられると思います。その段階で、メンバーは50人ぐらいになるだろうと展望していたけれどとりあえずこういうことをやろうとしているので手紙を出す人た

ちをみんな選んで、そういう順番でしたね。でも、みんな思っていたのは、設立趣意書に書いてありますけれども、結局は、いろいろな分野の総合化という言葉を使っていたけれども、みんなコラボレーションを求めていたのではないかと私は思っています。

——お待たせしました。それでは大塚さんに。  
大塚 私は、麹町の50人会からお声をかけていただきました。私の造園界はとかくクローズド・オープンスペースの世界で、他の業界とのお付き合いが拡がりにくいのですが、幸いニュータウン計画を手掛けることが多かったことからお誘いいただいたように思います。また花博に参加したこと、この会へ発展する良いチャンスがありました。

麹町の50人会の当時は、目的や体制について随分議論しましたね。

加藤 すごくありましたね。

大塚 その後、関西でも鳴海さんをキーマンとした準備会が始まり、加藤さんがご説明に来られましたな気がします。

加藤 あのときは、その準備段階の3年間で双方向のニュースレターなども出したし、準備している人たちが手分けして、ついでとか何かを利用して全国に行脚して説明しようということもやったのです。私は大阪と北海道へ行ったのですが、そのときに大塚さんも来られていて、20人ぐらい来られていきましたね。

大塚ええ。

加藤 あのときは、鳴海さんとか井口さんとか久さんが中心になってやっていただいたという感じでしたね。

大塚 関西の方はせっかちで、いまだにその体质が残っているのですけれども、そこから会の準備等でなしに実際に活動が始まってしまったわけですが、全体として、設立までに3年間かけたという会をつくり上げるまでの丁寧さといいますか、そのあたりがいまになって非常によかったです。

——近田さんもかなり当初からの参加で、しかも代表幹事を2期もやっていただくことになりましたが……。

近田 私、「都市環境デザイン会議」の命名者なんです。

加藤 麹町のときですか。

近田 「環境デザイン」ということばがあふれていたけれども、実態が何だかわからなかった。都市環境という視点で照明を加えようすると、みんな、ライトアップという視点でしか見てくれなかつたのです。そうじゃなくて、光として加わるべきだと思っていました。

「環境」とか「デザイン」というのは何なのと設計者だけじゃなくて、メーカーとか素材屋さんもみんな思い始めてきていた時期だと思うのです。それに対して、だれもちゃんと答えていなかった。

モニターメッセに参加したメーカーの人がえらく感激して、「こういうことだったんだね」と言うのです。都市環境デザイン会議ができる前は、都市計画家がコンセプトを出して、それを実際に設計する人が「かしこまりました」と図面を引いて、それを今度は照明デザイナーに…。そういうふうに言われて、そこから始めろと言っても「何だ、これは」という感じがあったわけです。実際に都市環境デザイン会議に参加して、ある目的に対しでの判断の仕方がそれぞの分野で違うとわかつたんです。私が今までつき合っていた建築家というのは、まず情念があるわけ。その情念に対していろいろな条件があるわけですが、その条件の排除の仕方でも情念が先行するわけ。ところが、都市環境デザイン会議の都市計画家というのは、最初に情念をカットしてしまう。だから、すごくドライにやるんです。そういうことがすごくおもしろかったです。

加藤 私たちは情念がないんですか。

近田 ないんじゃないけれども、その前の段階のいろいろな条件がきちんと説明できないと、情念が入る余地がなかなか残されにくいと……。

加藤 私はまだ本質的なことは一切言っていないくて、この会の発足時の歴史みたいなことばかりだけど、一つだけ経過的なことで言えば、非常に大事な話なので……。

「都市環境デザイン会議」の名前は、たとえば職能集団になればいいと思っていた人は、たとえば「都市環境デザイナー協会」でいいじゃないかとか、それはまずいんじゃないかとか……。たとえば役所の人も大学の人も入ってもらわなければいけないというので、それはないだろうと。では、「都市環境デザイン協会」にするかというので、いろいろありました。

南條 私が西沢さんとか近田さんと一緒に作業をしたのは沖縄海洋博ですから、あの場面で、やはりコラボレーションをやっていくこうというのを実態活動としてやってみて、曾根さんもそうだけど、いろいろ失敗したよね。そういう意味で、これに飛び込みやすい素地みたいなものはあったのではないかという気がします。

——その話はまた後でしていただくとして、曾根さんにも一言。曾根さんは最初から参加していただいているわけですが、これまで一般会員として見ておられたから、一番客観的にものが見えておられるのじゃないかと思いますが……。

曾根 そうでもないけれども……。ただ、発起人のころ、わりあいに重要な意見を何発か発した記憶があります。こういっては何だけれども、イデオロギーだと思っていたものが職業になり得たというかなりそうなのだからおめでたいことで…。

#### ●年代と時代観

この会で心感するのは、毎回送られてくるニュースを斜め読みしているのです。あれをみている

と、若い人に活動の主体が移っているという感じがして、私は非常に好感を持っています。ただ、残念なことに、私の感じだと、私は建築畠に半分以上足を突っ込んでいますけれども、そういう畠と皆さんの活動をやっている考え方というのが、昔よりもかなり乖離してきていますね。それは建築家の方がおかしいのか——これは後の方の話でしょうが、そう思いますね。また、仕事の性格がそういうものを持っているのかどうかというのを今日は聞きたいと思っています。

加藤 それはいいテーマですね。

曾根 それはともかくとして、私は、うまくいったということと、重心が若い層に移り得たというのはうまかったなと思っています。私たちが鉦や太鼓で何かやっても、「長老」扱いされることになってしまって……。(参考:会員構成)

—— この間、事務局に整理していただいた資料に基づきますと会員は40代を中心に、次に多

いのは50代、その次は30代で、30代になるとガクンと落ちます。

加藤 設立当初、入会資格を55歳以下にしようと言ったんだけど、曾根さんと西沢さんを入れないわけにいかないから。(笑)

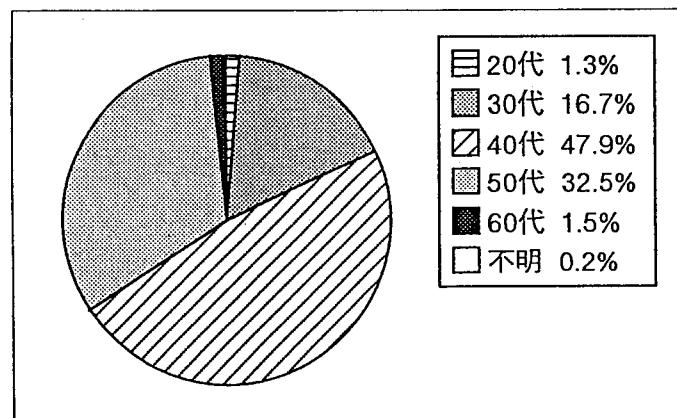
—— そういうことがありました、「なぜ私を入れない」という諸先輩がおられましたけれども、逆に現時点での組織問題として言うと、曾根さんに評価していただいたあたりが実はちょっと弱くなりかかっていると……。それは、時代観というか、時代精神というものなのか。それとも、また呼びかけたのがそういうところだったからそのままきているのか。そのあたりはどうお考えになりますか。つまり、私たちの世代から10年ぐらいというのは、そういうあたりに関心がかなりあったのかもしれないけれども、いまの若い人たちというか、30代あたりはどうなっているか。

## 会員の構成について

1995.11.19

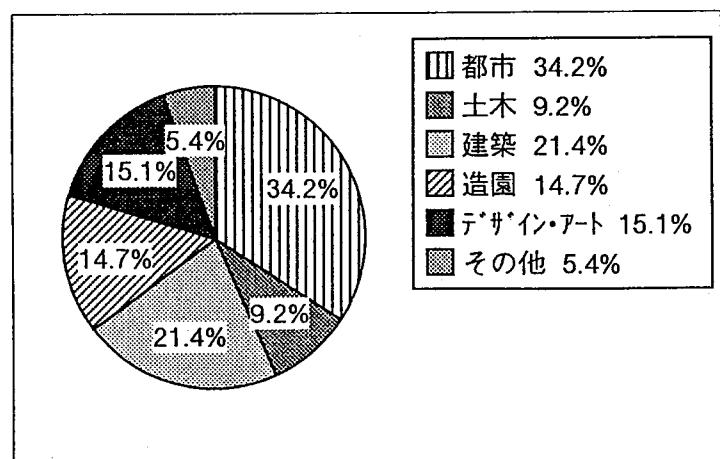
### ■ 年齢別分類

年代	人数
20代	6
30代	78
40代	224
50代	152
60代	7
不明	1
合計	468

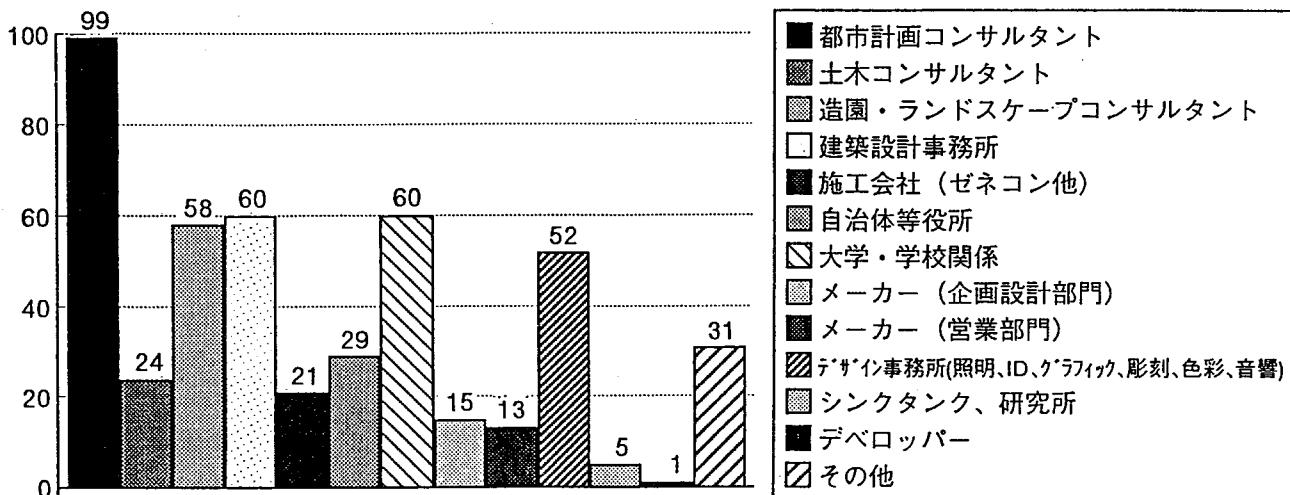


### ■ 専門分野別分類 (入会申込用紙を基本にしましたので、会員一人が複数の専門分野を記入している場合は複数分野に分類しております)

専門分野	人数
都市	190
土木	51
建築	119
造園	82
デザイン・アート	84
その他	30
合計	556



## ■ 所属別分類



南條 そこには確かにちょっと空白がありますね。しかし、いまうちの事務所に入ってきたいる20代を見ていると、また私たちと同じような問題意識にものすごく興味を持っていますね。要するに、自分の職域だけじゃなくて、他領域、あるいはソフトみたいなことに興味を持っている若手が意外と多いですよ。そういう意味では、もっと門戸開放というか、その人たちに入ってもらうような働きかけをやれば入ってくるのではないかという気がします。

曾根 普段こき使っているからね。

—— 多分、私たちは基本形が60年代でしょう。60年代というのは、わが国において都市化というのが標榜されて、発展性とそれなりの緊張感があった。80年代になってまた都市化時代が言われました。だから、ここに20年か25年間ぐらいのギャップがあって、私たちの頃はかなり無邪気に都市化時代に何とか対応しようというか、チャレンジしようというのがあったけれども、80年代の人たちはかなりよじれながら対応せざるを得ないというか、対応しているのかもしれません。

篠原 土木の方でこの会議にかかわっていたのはむしろ窪田君で、僕は窪田君に言われて土木代表みたいな形で首をつっこみはじめた。土木の場合は、歴史が浅いので年代論までいかない。むしろ他分野との交流の前に土木の中でどんな人が居るかという段階かも知れませんね。一人一人では会議に入って行くにはまだとまどいもあるような気がする。

## ■これまでの活動を振りかえって

—— 話題をかえて、現時点でのJUDIの活動に関して、5年を振り返っての中間的な総括ということで、自画自賛で結構ですから、これは加藤さんに一言で総括をしてもらいたいと思います。

加藤 非常にうまくいっています。（笑）きょうの議事進行案を見ていて、非常にうまいところを突いているなという思いがあったのですけれども、その中に「地域ブロックの主体的活動を尊重しようとしてきたことに関して」という、まずブロック活動ということと言えば、当初からブロックを中心としていこうというのがありましたね。それは、いろいろ行脚していくうちに、そういう思いがあり、もう一つは、それぞれの地域でそれぞれの——ある意味で言えば、地域性とか風土性みたいなデザイン面での重要性がそれぞれのブロックにあって、特に北海道などは強かったです。今回、徳島などでやってみても、まさにそういうところを幾つか感じたわけです。そういう意味では、ブロック主体というのは非常によかったのではないかという思いがあります。それが全国的に広がっていく上で、非常に効果も發揮しているといいますか、運動体として有効に作用しているのではないかというのがありました。

翻って、ブロック活動に限定して言うと、一番会員が多い関東がいまいち見えていない。これは大きいがゆえに、だれが中心になるかというの見えていない。単純にそんな理由なのかなと思うたりしますけれども……。

—— 関東というのは地域ブロックかどうかという問題がありますね。

加藤 そのところは、そういう思いですね。だから、ブロック活動を中心やってきたというのは非常によかったのではないか。大事なテーマだったのではないかと思います。

#### ●地域機能とセンター機能

それから委員会活動に関しては、それを補うものとして、まだ十全とは言えないけれども、それぞれうまくやっているなという認識を持っています。できたばかりの国際委員会などはまだ見えていないので、そういうあたりを強化していかなければいけないと思います。

そこで、これはさっきの会員の構成にも関わるのですけれども、やはり委員会活動などの中心になっている人たちが忙し過ぎるんです。それで、そろそろ若い人たちにそれをやってもらう必要性が相当ある。それは委員会活動の方に多いのではないかというふうに私はこのごろ思っています。

—— 申し送り事項ですね。

南條 ただ、きょう、中野君とか横川君には逆のことを言われましたよ。要するに、「長老」たちが代表幹事会の方にかまけ切っていて、実際に関東ブロックというのは非常に若い人たちが動いている。ただし、その中に引っ張っていく人がいない。それで、活動自体としてどういう方向を向いていいかわからないというような状況が生じているので、たまには来てくださいよという発言をされました。

大塚 年齢構成については、初代が引退した後は次の30世代が、総意を引き継ぎつつも、彼らなりのカラーで特色のある運営をしていくことと思いますし、その段階になれば、我々が今手の届かない20代にも彼らから継いでいけるのではないかでしょう。それを期待します。

西沢 地域ブロックの活動というのは、加藤さんが言われるように、私から言わせれば、大阪のように想像以上に活動しているところもある。

もう一つは、地域の機能とセンター機能との関係がまだ若干あやふやです。センター機能というのは何も東京ということではなく……。これは、どこの協会や集まりでもそうだけど、関東がセンターになると、センターと地域とがごちゃごちゃになってしまって、どちらをどう考えていいかわからなくなるという弊害があるのです。この点は、センター機能としての課題で、委員会として何をするかということですが……。

篠原 委員会は会員が持つ問題を集約して、ある課題に取組む所だと思う。研修・研究（委員会）はそういう意味では成功と失敗がある。失敗は会員のニーズを誤った各分野の演習のパネル。会員は必ずしも研修を欲していないということがある時点でわかった。成功は昨年東大の建物を借りてやった若年向のシンポでしょう。

大塚 ブロック活動が活発化していく中で、4年間やった代表幹事会は結構つらい仕事が多かったように思えますが、これも、各ブロック活動の支援や会の受け皿を整えてきたのかなと思ってい

ます。

—— 代表幹事会がマネージメントに徹していただいたおかげで、地域ブロックなり何なりが好き勝手にやれたという感じがします。

大塚 そう思いたいですね。

曾根 国際交流みたいなことは……。

—— 委員会ができたんです。かなり強力な国際委員会になるはずです。

南條 なるはすなんだけど、まだ全然なっていないんです。（笑）

### ■各デザイン分野からの都市環境デザインへのアプローチ

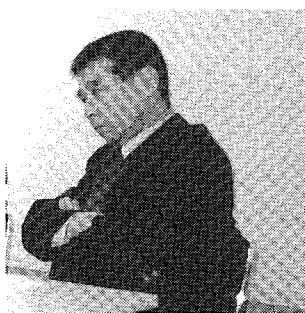
—— 次の話題へ移させていただいて、ここ10年ほどの都市環境デザインをめぐる社会動向、あるいは都市開発、建築とか、そういうところまで引き寄せていていただいても結構ですが、特に端的にいってバブル景気とバブル崩壊、平成大不況という状況の中で皆さんのお仕事を通じての都市環境デザインに関するご感想というか、どうだったのかというのを、これはジャンル別になるかもしれませんけれどもお話しいただければと思います。

西沢さんにはこれまでにも西沢論文をJUDIニュースに寄せていただいているし、加藤さんは徳島で「川下でデザインをしている者はもっと川上に近づけ」と言っていて、あれはちょっと極端な意見だなと思って聞いていたけれども……。

西沢 一般的に、ここにいるメンバーが川上というふうな言い方をする議論と、一般論としての川上の議論とは相当かけ離れているのではないかと思うのです。その辺で、ここにおられる、あるいはJUDIにおられる方以外の川上論の方が重要なってくるかなと思うのです。いま司会が各ジャンルでということでしたので、そういう点からすると、一般論としての川上が非常に形式論的な都市計画をすることで私は食べていられる。要するに、全部見直しばかりがくるわけです。だけど、見直しということにおいても、ある程度の都市計画的な法律とか量的なものというのはほとんど決まっていますから、ややジグソーパズル的にあっちへ置いたりこっちへ置いたりの中でパズルを解くという範囲におさまってしまうことがあるわけです。それは、どちらかというと川下的な話で、それをやらざるを得なくなってきたということが一つ。

—— でも、ここ10年というのは、いろいろな意味のデザインチャンスが各分野ともかなり増えたのではないかという気が私はしているんですが。

西沢 それは、すごく増えたと思いますよ。逆に、個人的な話で言いますと、私たちの世界だと、五、六年前までほとんど特命だったんです。変なややこしいことは全然なしで、特命でやってくださいと。だけど、最近はみんな入札で7社～10



社で指名競争入札を行うことが一般化している。  
—— ということは、やりたいという人も増えている。

西沢 完全に増えていますね。私たちの世界で言えば、いままでは工業デザインとか、グラフィックとか、そういう一般論としてのデザイン、80年前まで言っていたデザイン論というものに関しては、やはり消費文化や消費文明といった、そういうところに一つの重きを置いていた。それが崩れたんですよね。これで本当にいいのかもう少し社会的な意味合いというものに真面目に取り組まなくてはいけないのではないかというような意識と、黒字と内需拡大というのがうまくすり寄ってきましたのではありませんか。ですから、建築をやっていて都市環境デザインという領域に重きを置いている方というのは相当増えているのではありませんか。それは、多分一つは、建築の仕事がなくなったからこっちがいいという話と、もう一方では、建築というものある種の矛盾を感じ都市のレベルで捉えようとする志向と一致しているのではないかと思います。

大塚 私達のオープンスペース計画、またはデザインというのは、本来のもの作りの基礎空間のデザインなのです。中には自分ですべてを創り上げてしまうオープンスペース屋もおりますが、基本的には建築も含めてものづくりとの共同作業で成り立つものだと考えます。したがって、総合的デザインとしての環境デザインや都市デザインへと意志が向けられるのは当然だと思います。

—— それはいつごろからだと思いますか。

大塚 やはり実際的に可能性を拡大したバブル経済と一方で豊かさからの追求意識からでしょう。  
—— バブル経済というのは、たしかにひどい状況だったけれども、我田引水を承知であえていえば、われわれのデザインの世界に関しては、かなりいろいろな可能性をもたらせたのも事実でしょう。その結果がよかったですかは別としても、今まで全くそういうことがやれなかつたのがやれるようになったというあたりは、事実として認めなければと思うのですが……。

加藤 私は、それは半分反対ですね。なぜかというと、さっきの振り返りじゃないけれども、あちこちで無茶苦茶に金のかかった材料が使われ、いろいろ高級な仕掛けがつくられて……。そのときの私の思いは、一気にそれぞれの分野が勝手にやり始めたと思ったのです。コラボレーションというのはとんでもない、好き勝手にちぐはぐなことをやっていたというのがありますね。それで、いまだにそこのところはなかなかうまくいっていないですね。だから、そういうことをもうちょっとうまくやらなければいけない時期ではないかという思いが私はまだあります。

—— さっき南條さんが、まず都市はデザインできないという前提があって、つまり、それは業界としてはあり得ない、ギルドにはなり得ない組織だといいながら、この10年、多分「景観」と

いうくくりかもしれないけれども、その関心がすごく高まってきて、いろいろなところで景観というお金がついてきて、仕事がやたらに増えている。西沢さんがさっきおっしゃったように、やりたい人も増えてきたという状況が出てきていると思うのです。

#### ●根っここの体制は変わっていない

都市デザイン会議はサロンだ、仕事の上でコラボレーションが大切だというのも結構ですけれども、どこかで職能団体にしていかないと相当ヤバい状況ではないかという感じも何となくするのです。つまり、そのぐらいの需要があるのに、受け皿がみんな分野ごとのギルドでしょう。照明は照明、サインはサイン、土木は土木というふうにばらばらになっていて、この10年というのはその需要が出てきて、それぞのの分野に所属していれば食っているけれども……。

篠原 土木に関していえば、例えば橋では我々のような学部の人間と構造の人が組んで、あるいは大野美代子さんのようなデザイナーと組んでやることは着実に増えつつある。これは単体の話だけれど、街路では中野さん等がコーディネーターになって、サイン、照明、植栽の人がチームでやる場面も出てきている。良い状況は生まれつつあると思う。

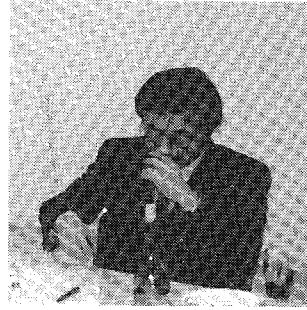
南條 でも事業に近づけば近づくほど旧体制のままですね。都市計画というのが官民境界線の官側という、その部分でいろいろなデザインもあり得るわけです。民サイドは宅地をつくって、そこは適当に民がやればよろしいとなっている。そこに建築というものが出てくる。中間領域としての、公開空地とかを制度としてはつくっていますけれども、そこがある種の生活展開の場面だ、われわれの豊かさというものを表現する場だという意味でのコラボレーション体制は全くつくっていない。

そういう意味で言うと、社会全体の仕組みとしての体制の中に、そういう場面を考えていくというのは、官側も民間側も両方がその意味での新しい場づくり体制というのをつくっていかないとダメだということをわれわれは主張していくべきで、そうやっていくと、結局、建設省とか国土庁とか、あるいは自治省とか厚生省とか文部省が言っているような枠組みで縦割りをやっている限り、どうもだめじゃないかというような意識になっていくのだろうと思うのです。

篠原 ここまで一足飛びにいく前に、もっと大きな課題がある。デザイナー同志のつき合い方というかな。端的な例はアーバンデザイナーと建築家です。やはり都市デザインの職能確立が必要になってくるのではないか。建築家がいつまでも強いのでは、よい町はできない。

—— 大切な話ですが、少し元に戻していただいて……。

南條 元に戻すと、私は、バブルは非常に異常な投機市場を形成してしまったという資本主義特



有の暴走ですから問題にするに足りないと思うのです。いま加藤さんが発言されたような変な花の開き方をしてしまった。問題の核心はむしろ成長ということを前提とした社会というもので今までの仕組みはみんなつくられているところにあるわけです。90年から95年というのは、確実に成長は1%か2%ぐらいしかない。そういう状態の社会運営をどうやっていくか。その中で豊かさをどうつくっていくかという場面にきていた。それに対して、この会議が何らかのきちんとしたことが言えない限り、われわれの仕事もないだろうという気持ちがいまは非常に強いんです。

成長期に成立する論理でなし得てきたことに代わって、では何を引っ張る機関車にしてこれからを過ごしていくのだろうかというのが、いま突きつけられているという気がします。会議はその点について相当の議論をしなくてはいけないし、その答えのいくつかを示さなくてはいけないのでしょう。本当のアーバンデザインを起こしていくにはむしろいい状況になったかもしれないという面があって、発注者側を教育していかなくてはいけないというのがより強くなっているかもしれない。彼らもオロオロしているわけだから何をやっていいかわからないという状態で、そこをうまく活用して、結局、川上側に立ってとか、川下側に立ってという論理はどちらも成立しないという状況になるのではないか。その両者が寄り集まつたところに、投資であれ、税の使い道であれ、それがより有効に人々の暮らしにつながっていくとか、あるいは利率が回っていくというようなところに集中して投資せざるを得なくなるのではないかというぐあいに持っていくべきかなと思うのです。

そのときに、ばらばらになっていたものが、そんなにばらばらにはあり得ないということがかえってよく作用するかもしれない。みんなでやるしかない。こしかかもポテンシャルがあって事業として成功するところがないところにみんなが集まつてくるという意味では、コラボレーション機会というの大きくなるかもしれないという感じを私は持っていますね。

加藤 私もかなり似ています。私がオヤッと思ったのは、私たちはコラボレーションをやらなければいけないというのはみんな思っているんです。だけど、発注者の側は……。

—— 全然思っていない……。

加藤 全然思っていないのではなくて、思っているけれども、思えない状況がある。そのところが大事なのですけれども、それはなぜかというと、年度ごとに予算が執行されるとか、工区ごとに工事が発注されるとか、担当が違うということはあるのですが、私は、どういうセクションから発注されても、うちだけでやるという仕事はほとんどないですね。いろいろな人を集めてしまう。そういうことの大変さみたいなものを発注者側にわかってもらうようにする。そういうふうにしていくうちに、新しい発注者であっても、彼らは、あるセクションから予算を出してくるのだけれど

も、おぼろげながら、そういう仕掛けが大事だなということがわかり始めていますよ。

申し上げたいのは、発注者側にわかってもらいつつあるというふうに、私はその辺は明るく見ていていますね。

大塚 実例としては、公団の宅地開発事業等で意識のあるキーマンが、業界を越えて意志疎通のできる人達を集め事業を活性化している場合がありますね。

#### ●川上のデザインと川下のデザイン

—— さっき曾根さんが、JUDIニュースを見ていて「いいね」と褒めながら、実は斜め読みしながら「違うね」というような言い方をされていたと思うのですけれども、その辺の話とも川上・川下論は関係があるのではないかと思うのですが……。

曾根 私は川下にいたいと思っているんだけど、どうも川上に回されて……。なぜ私は川下なのに川上に引っ張り出されんだと。

加藤 私などが「川上に来てください」と頼んでしまうわけですよ。

曾根 そうなんです。川上ばかり連れて行かれて……。（笑）それで、川下の仕事がなくなってしまうんです。

—— JUDIニュースを見て何か感じたことがあるというのは……。

曾根 それは別の話ですよ。私は、若い人ががんばっているなと思うのは、やはり都市環境デザインというのは対象が不特定人なんですよ。最近、私が一番感じたのは、西沢さんの世界で、サインの審査会に突然連れて行かれて、日本じゅうの広告塔から何から全部あるのですけれども、分野別にサインというものの審査をやっているわけです。非常に民主的な投票でやるのでありますけれども、あいう世界は気くばりがすごいなと思いましたね。つまり、やっていることは派手派手しいけれども、不特定多数の人を対象にしているから話がわりに地味になるんです。そういうところがあって。いまはね回っている建築家が多いけれども……。

南條 それは建築家の方が異常だと思いますよ。

曾根 たしかに建築家の方がよほど勝手なことをやっていると思います。

加藤 全く同意見です。

—— 近田さん、何かご感想がありますか。

近田 この会議に入って川上の人と考え方がわかった。私たちにとっては、全く奥の院だったわけ。上意下達だったわけ。だけど、そうじゃなくて、一生懸命川上に引っ張り出そうとする人もいるし、川上に行く人も川下からできる、そういうことがわかったと。

加藤 情念も捨ててしまったしね。

曾根 この間、加藤さんに頼まれて公団のメンバーを逆指名してその前でしゃべってくれと言うから、わざと宅開と住建を混ぜこぜにして5人ぐらいずつ頼んだのです。なぜ呼ばれたかというのを彼らはわかっているわけです。さっき建設省や

公団の割れている姿という話が出たけれども、やはり彼らにも一緒にやろうという気持ちはあるんだけど、動いてしまった文化が別のところに乗ってしまったりしているから気の毒なところがありますね。しゃべっていてそう思いました。大きなプロジェクトのときは、一緒にやろうじゃないかと彼らは言っているんだけど、できないんです。

—— 公団の中が縦割りになった理由は、建設省が縦割りだからではないですか。現場では一緒にやりたいと思っていても……。

南條 だから、野々村さんとか、初代の人たちはそれをやろうとしたわけですよね。

曾根 私が話したとき彼らはなぜ呼ばれたかわかっていますからね。

加藤 それはわかっていますよ。それから、ああいう場では、お互いにわかっているんだけど、なかなか「そうだ、そうだ」と言えないんです。要するに「おまえだけ格好いいふりをしやがって」と住建側からも言われるし、宅地部隊も「仲よくしようね」、「宅地部隊のこういう悪いところもあるな」なんて言ってしまうとヤバいから、ああいう場では言えないんですよ。

曾根 建設省がその通りになっていますね。

—— いま、いみじくも都市、建築、土木の話が出ていたけれども、これもまた非常に俗っぽい見方をしますと、実を言うと、みんな自分が一番川上にいると思っている節がありそうで……。もちろん、都市の連中というのは、言うなれば、制度とか事業とデザインをつなげるとか、プランニングとデザインをつなげるというふうに思っている部分があるわけです。建築の方はといえば、極めて古典的にいうと、建築がマザーアーツであると。だから、諸外国において、特にヨーロッパですが、建築家が都市計画、都市デザインを全部やっているじゃないかと思っておられて、なぜそれが現代になってから分解してしまって、建築が単体に落としめられているのかと言っている。土木は土木で、「根っこをつくっているのはみんなわれわれだ」と。当然、ランドスケープの方はランドスケープで、「そんなことを言っても、おまえたちはものばかりつくっていて、より大事な空間のことを何もやっていないじゃないか。空間を扱うのはわれわれだから、われわれがマスター・プランをつくるべきだ」というふうに思っている。それは少数かもしれませんのが、ともかくそう思っている。それで、何だかんだ言っても、みんな自分のところが一番川上だといっておられるのではないかというのがあるような気がするのです。

篠原 僕は建設省の建設大学校に土木系の行政職員の教育プログラムを作ってもらった。「公共施設デザイン」研修というのですが毎年40人で丸4年やった。彼らはかなり認識を改めつつありますよ。

大塚 川上、川下において最上流におられる行政の方々に、川下に至るまでのデザインに大きな影響を及ぼすデザイナーであるという自覚をもってほしいですね。法規というと何か規制的感覚ば

かりが先立つのですが、デザイン誘導という意識をもってほしいものです。同時にアーキフォーム的概念模型などを一緒に手掛けるといいと思うのですが。

南條 それで言いますと、たまたま私が沖縄のときに出会った荒山柑さんは、デザインというのは最終的には予算表の枠組のマトリックスをどうつくるか、これが最高のデザインだという哲学でした。要するに、大蔵省はそれをやって失敗したわけだから、大元はそこを改革しない限りダメじゃないかという気がしますよ。そういう意味では、金の配分をどう決めるかということがその後のいろいろな人のいろいろな動きをつくっていくわけだから、一番の大元はそっちだと思っています。

#### ●デザイン分野間に存在する誤解

加藤 私は、ちょっと楽観的過ぎるかもしれないけれども、やはりお互いにまだ誤解していますね。たとえば建築家がわれわれに対して誤解しているとか、いま、大塚さんご自身のお考えとか仕事の仕方じゃないというのはわかっていますが、都市計画が全部決めていってしまうとか規制してしまうとか、そんなこと全然考えていないのにあれがデザインの根源だろうみたいな思いを建築家が持っているとか、それから、ランドスケープ屋さんは建築家に対して似たようなことを思っているという場面によく出くわすのです。きのうも、ある設計事務所の人が来られて、よくあるケースですが、敷地を与えられて設計を始めてみると、いろいろなところで足かけ手かせがいっぱいあって、おれたちが思うのはこんなところじゃないということがあるわけです。

やはりそういうやり方はまずい、そういうやり方じゃないようにしようというのを一生懸命お互いに努力しているんですよ、われわれも建築家に対して不満がありますと。そういうのをみんなでコラボレーションをやりながらわかり合っていくというのが大事ではないでしょうかというふうに申し上げたのですけれども、いまだにお互いに誤解をたくさんしているわけです。お互いにクローズド・オープンスペース・デザイン協会か何か知りませんけれども……。だけど、一たん一緒にやってみると「そうだったのか」という部分がみんなわかってきて、そういうことの繰り返しをわれわれの会員がみんなそれぞれやればよくなっていくと私は思っているのです。それに尽きるように思いますね。

篠原 加藤さんの言う通りだと思うけれども、それぞれのデザインの力点や寿命等で本質的に難しい点もありますね。例えば土木の方は50年先を見こじているがファニチャーや照明は本質的にそうはならない。難しい所で最終的に誰が責任を持って判断するのか。

南條 結局、それは人間のか弱さといいますか、人のことを整理してしまわないと自分がすごく不安になるという性質に基づいているから、それを





どうやって解消するかという努力を払えば、結構スッキリ開けてしまうんですよね。

大塚 そうですね。それから、一つの川上から川下までの流れの中で——先ほど南条さんのお話のように、どちらかわからないということもあるかと思いますけれども、その一連の中で自分の影響力をかなり自認しておかないと……。

近田 川下側から言うと、少なくとも10年前は、「シャンデリアをお願いします」、「ポール塔のデザインをお願いします」だったんです。だけど、そうじゃなくて、いまは「この照明計画をお願いします」で頼まれるようになりましたので……。

加藤 さらに、「ガラス戸の材料を変えてもいいよ」とか「インテリアを変えてもいいよ」と私は言うでしょう。近田さんに手伝ってもらっているのがあるけど、そういうふうに言うわけですよ。(笑)

—— それは川上のご発言ですね。その間にいる建築家とか、インテリアデザイナーはどうなってしまうんだろう。

大塚 もう一つの川上から川下への流れの中に、西沢さんの論文にありましたように、新しいデザインが生み出され、それが一般に普及していく間に質の低下をきたすと言う問題もあると思います。それに対して我々は、デザインの質の監視役なのか、それとも常に新しいものを生み出して質の低下はともかく普及による全体的レベルアップをねらうのか、どちらなのでしょう。

#### ●都市デザインにおける手法？役割分担？

西沢 それは幾つかのレベルがあって、一つは、川上か川下かは別にしても、ある一人の作家なりプランナーがあるイメージを持って全体的なプランからディテールまでビシッと押さえていく、かつてのアーバンデザイナーと言われるような人たちの話もあるわけですね。

二つ目には、いろいろなジャンルの人をうまく組み合わせながら、自分の持っているイメージをつくらせていくというようなことがある。そのときには、川下の方の人は、そのイメージというものをいかにして理解しようかというところに尽くすわけです。

加藤 徹底して川下になってしまい。それはよくないね。

西沢 ええ。そうすると、そこでは幾つかの造形、あるいは空間的ボキャブラリーを持って、AかBかという形で操作されていくということがあります。

三つ目は、その人が何をつくるかわからないけれども、要するにAとBを相撲させてCとDをつくってしまう。化学反応で何が出てくるか全然わからないけれども、そこでけんかさせながらものをつくっていくというような形もあるだろう。ですから、そのときに全体をつくり上げる手法を考えたり選んだりすることも、一つの創造的作業だと思うのです。そのほかにもいろいろな問題があ

りますよ。逆に川下から見れば、積み重ね的論理で、とにかく上はわからないけれども、アメーバーのように組み合わせたときに、ゾウができるのか、キリンができるのか、毛虫になってしまうのかというような、そういう手法もあると思うのです。

曾根 暴君型と、ケンカ型と、調整型、積み上げ型、この四つをやればいいんですね。

南條 マイスター、コーディネーター、プロデューサーですね。

#### ■都市空間をどのように捉えるか

—— ところで、ここでは皆さんにご意見を伺いたいのは、都市環境デザイン会議でせっかくみんなで集まって、サロンというか、活動をやっていま一つ気になるのは、みんな傷をなめ合うみたいなところがあるし、いろいろな事情がわかっているから言わないということもあるのでしょうかけれども、もう少しある空間なりデザインに對して率直にものを言わないと本来的な交流にならないのではないかという気がしているのです。

曾根 私もそう思いますね。

—— 特に、せっかく「日経コンストラクション」で「土木批評」という欄を篠原さんが働きかけてつくったのが3回でつぶれて、つぶれた原因をつくったのは、どうも私が批評側で入ったときのようなんです。批評する側、される側に各々問題があったようなんですが、そういうようなことがあって、批評というものがなかなか定着していないわけです。多分、建築とか造園の世界ではある程度あるのかもしれないけれども……。幕張の都市デザインも、批評はされていないけれども、ページの割り当てを見れば、建築ジャーナリズムでどういう評価が起きているかというのはよくわかる。

篠原 「つぶれて」というのは誤解で、土田さんの回が表に出なかった。まだ続いていますよ。ただ土木の側からみると建築もチョウチン批評が多い。本当に使う側から見てよいのかという批評も欲しい。仲間のなれ合いの建築より健全な点もあります。

曾根 要するに、こちらから見ると、ジャーナリズムの視点がおかしいのではないかと。

—— それもある。ジャーナリズムもおかしいけれども、私たち自身が他人のものに対してちゃんとものを言っていかないと。デザインのガイドラインをつくって、みんなその約束で始めたのが、違反だとみんなムニヤムニヤ言っていて、「あれはおかしい」とはっきりは言わない。もうちょっと率直にものを言うようにならない限り、コラボレーションといっても、結局、力の強い方が勝ちと。

南條 私は、デザインできることの幸せというのは、ある種の自己実現をデザイナーの方はそれでやられるかもしれないという側面と、結果とし

ては、何をつくるのであれ、もの言わぬ批判者である利用者、それとの間の接点をやっていく人がいない限り、ある種の説得力は出てこないと思うのです。だから、アーバンデザインというのはそこにあるのではないか。横浜の西脇さんも多分そういう意見だと思いますけれども、つまりコーディネーターの立場をとるとすれば、その観点から見て、これはちょっと行き過ぎたなと思うことがあれば、それを言わなければいけないんですね。そういうコーディネートをやった上で、それを社会化するという場面を担うべきだとずっと思っていまして、その意味で言うと、デザイナーたる人の多くは、勝手主義に近い個人主義化してきていますけど、まだ十分成熟し切っていないのではないか。

西沢 さっき市民とか住民参加という話が出ましたが、市民に寄りかかってしまう姿勢をどうしたらいいかということがあるわけです。これは、工業デザインの場合は、1960年から70年は、言ってみれば、アメリカは流線型という形をつくった。その後、それが行き詰まつたら何をやったかというと、マーケットリサーチに走ったのです。どんどんマーケットリサーチして、とにかくユーザー志向をめいっぱい取り入れる論理をつくり上げてきた。逆に、今度はデザイナーがそれに乗ってしまったのです。乗ったために、つい最近ちょっと元気になったけれども、アメリカの家電商品がほとんど売れなくなってしまったという事実があるのです。

#### ●市民と専門家

ですから、今回の都市環境デザインというか、デザイナーが市民の理解をどのように取るかという、要するに腰の落ちつきどころというか、指針というものをデザイナーがきちんと持たない限り、非常に危険なことになる気がするのです。

南條 放っておけば衆愚型にどんどんいってしまう。逆に言うと、市民をいかに教育していくかという意味で、「やはりあの人はいいこと言うな」と思われないといけない。「きょうは目が洗われた思いがする」みたいなことを常に講演会とか何かでは言わなければいけないと思うのです。それがひとつのクリティックのひとつの役割です。とにかくまだ市民が市民になり切っていない。それは、ほかの国で「あそこの市民はすごい」というのはお目にかかったこともないですから、いつもそういう問題は抱えている。人間社会というのはそういうものだというふうにとらえた上で、なつかつ、その接点をやっていかざるを得ないのではないかという気持ちは強いですね。

大塚 例として少し古い話になってしまいますが、ハルプリンなどがワークショップで一時ならしましたね。彼のやっているのを冷静に見ていると、ワークショップというのは、市民の方たちのデザインを取り入れて彼が作品化したのではなくて、かなりの部分コンセサスの取りつけにやっているのであって、作品はやはり彼独自なん

ですね。

加藤 いまの議論は私もしょっちゅうぶつかる議論ですし、仕事でもそういうところで悩んだりするのですが、答えは、そういうものの上手なバランスを見つけるしかないと思いますよ。

西沢 もう一方では、バランスという言葉だけではできない部分があるのでないかと思うのです。

加藤 それは百も承知の上で言うのですが、エピソードを言えば、いま丸亀で近田さんに手伝ってもらっていますけれども、ある建物の材料を決める色はときに、みんな迷っているわけ。私も近田さんも外野なんですよ。だけど、「こういう方が行政として落としどころでしょう」とか、「市民受けするでしょう」と私が言うわけ。そうすると、近田さんは「それはズルい」と言うんです。だから、情念のなさを言われるわけです。だけど私はそれぞれの分野のデザイナーの方には「思う存分やってください」と言うわけです。だから、外野の立場に徹するようにしているわけです。(笑) だけど、一方で非常に危険だなと思うのは、ほかの仕事でも、わが会のメンバーである大家に一つやっていただいているのですけれども、私の目からすると、情念が先走り過ぎて、ものすごくバランスを失しているなと思う部分が見えてしまうわけです。そのところは批評として言わなければいけないと思うので言っています。さもなくば後でたとえば市長さんが落選してしまうみたいなことにつながるとか、そういうのがあるわけです。だから、情念がないからというふうに言われてしまうと元も子もないけど、そういう情念を持ちながら……。

近田 私は、自分の情念と言わないところがズルいと言っているのです。

加藤 私はその立場にないから。コーディネーターの情念です。

大塚 川上がバランス感覚で川下が情念であるなら、川上から川下を見る場合にはデザイナーのキャスティングが勝負と言うことになりますね。

加藤 それはそうです。

大塚 本当に川下の下の下では、情念というか、自分のデザインでしかないのではないかと思うのです。ただ、そのあたりで川上が川下をどう見るかというと、ミスキャストで入れ替えるかどうかの違いぐらいになってしまうのではないかですか。

曾根 そのとおりですよ。とんでもない話です。

南條 それはそう考えてはいけなくて、たまたま土田さんなら土田さんの話を聞く機会のあった人は、本当にそのときに「きょうで目がさめた」と言う人がかなりいるんですよ。逆に言うと、それは気をつけなければいけないんです。そう思われて、その人が何かに走ってしまったとか、私は体験上そういうのがあって、これは怖いことだと。





### ●建築デザインと都市デザイン

—— 曽根さんにお伺いしたいのですが、60年代は建築家が都市にかなり関心を持っていたのが、70年代に入ってタコつぼに入ったようで、80年代に入ってちょっと顔を出しかけてまた首を引っ込んだと思ったら、85年以降、つまりバブルになって以降ですが、最近また建築家が都市に対して積極的になってきたようにみえる。例えば熊本アートポリスの中堅若手建築家の登用とかいくつかの集合住宅プロジェクトとか、都市デザイン的な見方も必要なコンペとか、場面がいくつも出てきている。建築家が都市と建築というか、都市との関わりをどのようにみているか……。

曾根 いまも昔と変わっていないんじゃない。ある種のイデオロギーとして都市デザインとか環境デザインを言いながら、人を説得しながら、自分のやりたい建築をつくっていくという図式は変わらないですよ。

加藤 私も全くそうだと思います。だから、土田さんがおっしゃったのは、私は全然そう見ていないですね。

曾根 一般的には、基本的に変わっていないと思います。

加藤 もっと言えば、JUDIに集まっている建築家の方たちは、入っていない建築家に比べるとお互いに話しやすいけれども、そうじゃない人は全然変わっていないですよ。

—— 優秀というか、本来、建築デザイン界をリードするような人たちが、一時、都市から顔をそむけていたという事実があるわけです。とくに70年代……。

南條 そのとおりですね。バブルで仕事がいっぱいになって、それは確実にこれからはなくなるのだから、その意味では非常に正常な方向に動いているなという感じがします。

—— 多分、当時の西ベルリンでのIBA以来だと思うのですが、IBAは1985年でしょう。その流れが日本に来て、熊本でアートポリスを磯崎さんがやった。あれは私はアーバンデザインだとは思っていませんけれども、とりあえず建築を都市の中に置くということの文化としての意味みたいなものを認識させたと思うのです。これに前後して六甲アイランドとか、南大沢とか、複数の建築家が集合住宅を競作して一つの都市的空間をつくる例が出てきた。幕張などはその典型だと思うけれども、建築家も非常に関心を持っているようと思える。「私も一枚加わりたい」というのは、別にビジネスチャンスが欲しいというだけではなくて、ああいうことに参加してやってみたいというような意味合いが大分出てきていると思うのです。それは、一体どういう社会の変化なのか、建築家の意識構造に変化が起きているのかと思ったものだから……。

南條 でも、アートポリス、あれを仕掛けた意味合いというのは、私も細川さんの21世紀懇話会というのに入っていて、さっきの答えになりますが、首長と情念のデザイナーとが出会うと、

ある種のパチーンという接触が起こって、伊藤滋とか私が言うのは完全無視みたいな状況になってしまうのです。情念同士がぶつかってしまうから。それで、あれと思っているうちにアートポリスの方へ行ってしまう。でも、結果として生まれたものを見ると、ひどいもあるけれど山本理顕の芝生と瀬島さんのインテリアというのは、見に行って「ここまでやってくれるんだったら、これは許す」という気持ちがわきましたね。そういう意味では、着実に若い層の中にそういう志向をしてくれる人たちが出てきている。

—— それは、建築の批評をしてという意味ですね。

南條 そうです。しかしその思考を拡大するとアーバンにつながる。

曾根 ちょっと言わせてもらうと、幕張とアートポリスは決定的に違うわけです。なぜ違うかというと、私に言わせると、幕張というのは19世紀的なことを自覚してやっているんです。なぜかというと、19世紀的なものを日本はその時代にちゃんとやり得なかったのではないかと私は思っているからやっているわけ。アートポリスはどういうものかというと、要するに極めて現代的な感覚——若い人が持っていると思うのですけれども、それは何かというと、たとえば距離がなくなるとか、距離よりも関係性が強まるとか、プッシュボタンを押せばどこでも電話ができるとか、そういう距離よりも関係性とか、遠いところから来る電車も……。そういう情報網の中でフワフワ浮いている。いまの若い世代はそうなっていると思うのです。自分が行くところといえば、興味のあるスポットだけ行きたい。そういう関係だけが都市だというとらえ方があるわけです。何と言っていいかわからないけれども、そういうとらえ方の中で、そういう状況をうまくとらえてやった一つのアーバンデザインの手法だと思っているのです。

南條 それはちょっと異論もありますね。では、日本に19世紀がなかったかというと、そうじゃないでしょう。

曾根 19世紀と言っているのは、日本も含めて世界的に起きた特長のある都市文化のかたを言っているのですが。

南條 それは完全にヨーロッパの19世紀ですよ。

加藤 違いますよ。曾根さんの論文を読んでいただければわかりますが、曾根さんの論点は通りのつくり方ですよ。私がいま一番まずいと思っているのは、都市の文化ということへの思いの欠如をすごく感じているのです。それで、21世紀はそれを何とかみんなにわかってもらえる時代にしたいというのがものすごくありますね。たとえばアートポリスというのは、やはり都市の文化をかなり放棄した姿勢だと私は思っているのです。放棄したというか、それを忘れているというか……。

—— そうですか。私は、それしかないと思っているんですけど……。アーバンデザインだとは言わないけれども、ある地域文化の振興の上で建築が与える影響の大きさというものを熊本は出し

ていると思うのです。

曾根 私もそう思います。

—— それが長期的なレベルで市民の文化水準を上げ、それがアーバンデザインの方につながっていくという可能性に賭けるというか、期待するところ。

加藤 私の意見は、私の都市の文化みたいなところがあるのかもしれませんけれども……。一方、幕張の場合には、それにこだわろうとした部分が相当あるのではないか。都市の文化というのは、もうちょっと平たく言うと、ついでの楽しみができるとか、特色のある都市空間に接していられるとか、もっとソフトな領域で言えば、サブカルチャーがその都市にたくさんあるとか……。

南條 いずれにせよ都市デザインとしては、曾根さんたちが幕張でつくったあいうものの中庭でどういうソフトであそこに本当に人が座っているのかとか、通りをつくろうとしたらその通りの上でどういう人が本当に活動をしているのかというところのソフトと一緒にやらない限りだと私は思うのです。

曾根 だめだということではなくて、今の話では方法が判らない。ソフトと一緒になんかなかできないのではないかと思いますよ。

加藤 私が言いたかったのは、もっと次元が低いんです。私はアートポリスというのは、細川さん一流の全くのパフォーマンスだと思っています。だから、私は幕張でやった方がうんと評価しますよ。そのときに、どれだけ情念から遠ざかって考える人がいたかいなかの差があると私は思っているのです。

曾根 ご両者が指摘したことは極めて重大なことだと思っています。

西沢 都市計画と言っているけれども、基本的には建築出身なんですね。みんな建築を愛している人ばかりだから。議論が都市論にならない。建築論になるんです。

曾根 花の話ばかりして枝の話はしないですね。西沢 曾根さんが言われた二つの問題で、情報化時代の考え方ででき上がっているという視点は、今日のデザインで重要なポイントだと思うのです。私は、都市というものを片方では情念とか、そういう問題は当然必要かもしれないけれども、もう一方では文明論をもう少し徹底してやついかないと、本当の都市というものが見えてこなくなるのではないかと思うのです。

## ● ランドスケープデザインと都市環境デザイン

—— 話を少し戻します。JUDIニュースでここ数回三谷さんにアメリカのランドスケープデザイン界の紹介と若干のわが国の批判を含めた文章を載せさせていただいていますが、最近、ランドスケープデザインの方はかなりコンセプトアートというか、コンセプチャルデザインというか、それが非常に流行していますね。その辺も含めて、大塚さん、ランドスケープデザインの昨今及び今後のことを少し話題を提供してください。

大塚 日本のランドスケープは公団と言うパブリックオープンスペースにおいてさえ、利用空間としてよりも庭園的鑑賞空間として造られる傾向が強いと思います。また、美しい景色で質の高い何のない空間をつくることに臆病で、すぐに施設や目的性を明確にした施設型空間で埋めたがります。

都市公園法を注意してみると面白いことが分かります。そこには、公園は本来空き地であるべきであるが、必要によって造ってもいい施設が挙げられています。便益施設とか修景施設とか園路広場などです。しかし実態は造ってもいいと言うのを造らなくてはいけないと勘違いしているのではないかと思われます。要するに都市公園法では基盤となる空き地をなにも定義していないし、造る側も空地の実態と効果を追求していないのです。

先ほどのコンセプチャルアートもこのような見方からすれば、使う側よりは造り手の方が実感しえる空間の実体化の一つであって、庭園化する発想に近いと思います。私の持論なのですが、図となるデザインをのせる地のデザインが必要だと思うのです。特にランドスケープと言う空間なり、風景のデザインでは地のデザインが最重要であって、そこにおいて図となるデザイナーによる図のデザインであるより、ユーザーの生活シーンそのものが図となってのってくことが好ましいと考えるのです。

近田 私、関西の方々がまとめた本の中で、大塚さんが楽しそうなところとか、人がたくさん集まるところをいろいろ区分分けされていたのがすごくおもしろかったです。

大塚 私は作品の写真を撮るよりも、使正在する人のシーンを撮る方が好きです。

南條 そうですね。

大塚 タウンスケープにおいても、一方で情念によるデザインが一般化され、その普及によって全体的レベルアップがなされるのと同時に、都市全体の中で地になる場なのか、あるいは図としてエキサイティングな場となるべきところなのかの見極めが必要だと思います。その中で、図となるのはスペシャル・オケージョンであり、地のデザインをどうするかが問題ではないでしょうか。

南條 都市計画というのは、それを定めることになっていないわけです。地域地区制というのも、全国一律商業地域というくくりだけで、それで納得できると思っているから、そういう範疇しかつくれないけれども、そうではないのじゃないか。



くまもとアートポリス  
(県営保田窪第一団地)



幕張新都心住宅地区  
(パティオス1~6番街)

都市計画がそれぞれに個性のある地区の設定をしていくようにした方がいい。

大塚 そうですね。それを見つけることはランズケープ的に大事なことだと思います。

西沢 でも造園を見ると、建築と同じなんですよね。

ある敷地が与えられて、片方はやや機能があるけど、片方はそこで自由気儘にできるじゃないですか。そこでコンセプシャルアートみたいなものとか、アースアートみたいなものをつくってしまって、建築と一生懸命戦争をしようみたいな雰囲気が見られるんです。

大塚 逆に、建築に同化し過ぎていて、建築の外構化しているような気がするのです。

西沢 私はいつも思うけれども、新宿御苑はなぜ柵を取れないのか。日本の公園はほとんど柵じゃないですか。だから、地というか、そういう本質的な都市の中の空間というところの議論をしないと、変なコンセプトアートで芸術か何かよくわからないことになっていくと思うのです。

大塚 まさに新宿御苑とか公園は傾向はそうじゃなくしようとはしていますけれども、一般的に都市景観に対していい方向で作用していないですよね。

近田 造園計画とされているものの照明計画を頼まれるとしますと、いただいた造園計画というのは、ただただ園路なんです。その計画の中に出来事がないんですよ。人間が何かやる出来事がちょっと見えないんです。

大塚 これをやってくれとか、これを見てくれと、非常に押しつけがましいですね。

加藤 その前に、たとえば市民の側に立っての話とか、それ以前の批評の問題とか、コラボレーションの問題とか、それとか情念というのもある種キーワードになってしまったけれども、まだ本質をお互いに十分理解していないところが多いということがありますね。

思って、それがコロッと変わると「ヤッター」と思って、そういう意味で満足できてしまうけれども、そうなっていけばいくほど現実社会に對して自分の関与というものをなるべく少なくする。隣の人とはつき合わないという社会にどんどんしてしまっている。それでまちが無くなる。豊かなくらしを支えるまちではフェース・ツー・フェースとか、そういうコミュニケーションをやっていく機会をつくらないと、高齢化社会には対応していくのではないか。低成長における社会というものに対して、豊かさ感とか、そういうものを与えられるのはそこしかないのではないかという気が私はしているんです。

加藤 そういうことで言えば、急転直下で言いたいのは、つましい心の幸せとか、一瞬でもいいのですが至福の時を求められる都市の空間とか施設はどこにあるのということですよ。

—— ちょうど話題が予定の「デザインを行うにあたって心すべきこと」というあたりに触れてきたように思います。この点について日頃どのように考えておられるか一言。

南條 やはりデザイナーもプランナーも自己実現とは何なのかというのをもっとよく考えてみてほしいと思うわけです。人を人であらしめて初めて自分も人になれるという、その観点でデザインとかプランニングを考えるのでなければほとんどあり得ない——お詫びですね。(笑)

加藤 だから、一時の至福の時を感じるようにやろうということですよ。

南條 宗教団体だね。(笑)

加藤 ちっぽけな幸せを見て、「きょうは楽しかったね」と子どもが帰って行かれるような、私は真面目にそう思っているんです。だから、いろいろなことが気になるのです。

南條 風下でそう思えばいいけれども……。

加藤 だから、川上じゃないんです。川下も問題なんです。

#### ●つくられた多様化

西沢 ただ、われわれは言葉で価値の多様化とか、いろいろ言うけれども、決して多様化していませんよ。

大塚 つくられた多様化ですね。

西沢 ええ。実はきょう、足の親指をけがしてしまってサンダルを買いに行ったら、伊勢丹を回って、三越を回って、ワシントン靴店を全部回って、みんな無い。「それは夏の商品ですからありません」と全部同じ答えです。そのぐらい多様化の時代でどうのこうのといっても、現実にないということです。

曾根 西沢さんを切っても、大衆を取った方が得だと思っているんですよ。

西沢 そういうことなんです。つまり、売れ筋はどこかというマーケットリサーチの世界だけになっているんですね。

南條 いま、行政が市民参加をやろうとすると、



南條 だから、こういうコミュニケーションの場がより大事だし、それがいまの市民社会では、資本主義を追いかけて行けば行くほど、商業主義が絡んできて、そういうめんどうなものなしでもいいますという道をとにかくつくってしまうわけ。いま、マルチメディアとか何とか言っているけれど、それにどんどん入っていって、つまり心というのは、テレビドラマの中のドラマに本当に感動してしまうわけですよね。「畜生！」とか何とか

ある特定の常に行政に興味を持っている人しか集まらないような会合の開き方しかしない。私たちがプランナーの立場から本当に来てもらいたい人というのは行政のしててることに全然無関心ですから。

—— そうじゃなくて、本当にまちづくりに参加したいと思っている市民が非常に多いと思うのです。

南條 私も、潜在意識としてはすごくあると思います。

—— もう潜在意識ではなくなっているのではないかと私は思っているわけです。もちろんプロがついてあげる必要はあるけれども、発想とか、ある空間に対するある種の理解というか、方向性を出すということに関して言えば、別にペーパーをどここのインターロッキングにするとか何とかということじゃないわけだから、かたくするか、やわらかくするかとか、どういう常緑樹を植えるか落葉樹を植えるか、水を入れる入れないとか、そういうような話は一般的の市民の方でも、ここを何とかしなくてはいけないと思っている人たちはわかっているわけですよ。つまり、ちゃんと議論している。そういう人たちは事実ですよ。ただ、そういうチャンスがないというか、ミスマッチが起きていると私は思っています。

南條 要するに、さっきの資本主義としての戦後を引っ張ってきた自民党路線というものに余りにも固着化しているところがあって、2LDKとか3LDKという時代は完全に終わっていると思うのに、いまだにマンションというのはそういう形でしか売り出されないということ自体がおかしい。そういうことに対して建築家は何も言わないというところがおかしいんですよ。

加藤 私たちが言わなければいけないんですよ。

南條 もちろん私は言っていますよ。

曾根 でもいまの南條さんの意見は虚しいです。

南條 虚しくないです。

加藤 建築家じゃなくて、私たちが言わなければいけないんです。

南條 そんなことないです。それは、売れないという現象が結果としては起こってくると思いませんよ。

曾根 建築家は、人種としてはかなり先進的ですよ。さっき、アメリカでマーケットの話があったでしょう。マンションに関しては、マーケティングがものすごく進歩しているというか、隆盛を誇っているわけ。少々まゆづばに思ったりもするけど。その結果、ものすごいマニュアルができるわけです。だから、いいと思っているわけではなく、私たちも戦争をしていますよ。だけど、なかなか受け入れられないですよ。

—— 彼らの商品企画というのはマジョリティーを相手にしかやらないですから。

大塚 錆びたら取り替える世界なんですよ。

西沢 私が思うのは、単なる商品は基本的に住宅と違っていて、それは個人が楽しむ話だからいいんですよ。ただ、われわれがやっている都市環

境というのは、不特定多数の人間が生活することにおいては、個人のマーケティング的な要素で議論をすると誤りを犯すのではないかということです。

### ■都市環境デザインを行うにあたって心たいこと

—— 最後に、皆さん、このさい是非ということがあればお願ひします。

西沢 先ほどでていた文化と文明論的な話は非常に重要で、要するに文明論的な話というのは、共有観とか共有性とか、そういうものを原則論としてもっていいといけないという感じがするわけです。共有観というのは、一つのヒューマンレベルの共有観もあるだろうし、もう一方では科学技術の共有観というのもある。原則的に科学技術というのは共有観を前提にして進歩していくわけでしょう。そういう問題で、いま老人問題から公害問題からいろいろある。これも一つの文明論なんです。

それから、いま、都市デザインで問題視されている郊外型のショッピングセンターがどうなるこうなるというのも、全部文明、ようするに時間の流れの中で、単にいま位置づけられているだけ。だから、そういう時間概念の中で議論して、都市というものがどういうふうな形になるかという仮説を常に立てていくことが、これからデザイナーとしては非常に重要なことではないか。仮説ですから、崩れることは当然あり得る。だけど、現在の時点で真実は何かということを問うべきだらうという感じがします。

加藤 私は、西沢さんのおっしゃるとおりでいいです。要するに、都市の文化を大事にしてがんばりましょうと。

南條 私は、西沢さんの共有観みたいなものが、結局はコミュニケーションですけれども、コミュニケーションの中で大事なのは、仲間同士が話し合うとか、そういう特定の集団が集まるのではなくて、現況の社会状況としてはそれが一番表に出ていますけれども、そうではなくて、不特定多数というか、つまり言葉は交わさないけれども、ある場所にいる。そのときに、見る、見られるみたいな関係のサイレント・コミュニケーションと私は言い出しているのですが、そういうことができるように場面をまちが持っていく限り、やはり21世紀社会には対応できないのではないかというふうに押していくべきだというふうにいまは思っています。

近田 私は、そう大それたことではなくて、自分の子どものときの記憶とか、環境の記憶と生活の記憶というのを引き継いでいきたいというふうに思います。

大塚 余り高邁な話じゃなくて、現実の仕事の話ですけれども、特に公園等については、われわれは実験しにくいんですよね、わが国にいると。



諸外国の方がいいとは言わないですけれども、公園でなくても、たとえばバリ島の縁でも構わないのですが、特に川上にいる人たちは視察という形でものを見て、あり様だけ見て、持って帰ってきて何かやるという世界なんです。実感してくるというか、ひたってくるというか、たとえばニューヨークのセントラルパークに1ヶ月いるとか、そういうことをやらないと、上辺だけの話で本当のことが全然わからないんじゃないかと思うのです。

篠原 僕はこの頃歴史の蓄積の大切さということをしみじみと思います。景観づくりというものはものとの関係からより深化して先行するものに対する敬意ということなのではないかと思う。

都市デザインもそうですね。大谷先生の東大図書館前の建築もそうですね。内田さん、岸田さんの

法文（建物）に対する敬意が感じられる。それにやはり、先人のデザインとその思想を知ることがキヨポイントになる。江戸の、明治の、大正の……。これらの積み重ねが都市というものだと思っています。

曾根 とくにないですね。川下でいたい人だけど、出来事にしても、モノにしても、都市の文化というか、モノを差異化するというのと同化するというのとあると思うのです。それをどう調整していくかというのがわりに大事だと思います。いつも、そういう場面が非常に多いんですよね。

南條 それは根本的ですね。

曾根 出来事でも、モノでも、その調整みたいなことがかなり重要なことだと思っています。

の方が遅れているというか、あてはまらない地域が非常に多い。そういう意味では、空間的にずっと連続しているのであって、それは東京にいると余り感じないかもしれないけれども、その辺がかなり気になります。アーバンデザインが提唱されすぐの60年代のアーバンデザインというのは、都市が都市らしくないのをいかにもっとちゃんと都市らしいいたずまいと、そこで生活をどうするのかというような問題提起をしていたと思うのですけれども、今日は、東京もそれなりにがんばらなくてはいけないけれども、どうも違った局面が都市そのものをめぐって起きているような気がするのです。長時間どうもありがとうございました。

——了——



# 選挙管理委員会 公告

## 都市環境デザイン会議会員各位

都市環境デザイン会議  
選挙管理委員会  
委員長 菅 孝能

告示日 1996年2月5日

### ■都市環境デザイン会議代表幹事ならびに監査役の選挙について

この度、役員の任期満了に伴い、代表幹事、監査役を選挙により選任することになり、選挙管理委員会を設け、選挙を行うこととなりました（役員選挙規定第12条による）。規定第7条2項に基づき下記のとおり選挙の告示を致します。

以下の点につきましてご留意の上、多数の立候補を期待いたします。

#### 記

1. 今回選出される人数は以下の通りである。

代表幹事 10名

監査役2名

2. 役員は、あらかじめ会員の選挙によって選出された候補者が、7月（予定）の総会において承認されることにより選任される。

3. 選挙権と被選挙権

第6条 選挙権を有する会員は、選挙告示の日から一ヶ月前（1996年1月5日）までに会員としての資格を有したものとする。

2 被選挙権を有する会員は、選挙告示の日から一ヶ月前（1996年1月5日）までに会員としての資格を有したものとする。

4. 役員の任期は2年とする。

5. 候補者の形式について

代表幹事、監査役の選挙には2通りの形式がある。

(1)自立による立候補

(2)選挙権を有する正会員2名の推薦を受けた推薦候補

6. 推薦人は候補者を代表幹事においては2名、監査役については1名までを推薦できる。

7. 候補者の届出は次の様式にしたがつた届出書を用いて行う（大きさはB5）。用紙は事務局に置いてある。

8. 推荐候補の届出には、候補者本人の自署、捺印が必要になるので注意のこと。

9. 届出は、都市環境デザイン会議選挙管理委員会（〒113 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビル TEL 03-3812-6664 FAX 03-3812-6828）宛とし、提出期限は1996年2月23日（金）午後6時とする。

10. 投票は、役員選出規定第7条に規定されているとおり、別紙送付される投票用紙によって、無記名、通信制で行うものとする。なお、投票期間は投票用紙送付（3月20日頃）から4月2日（火）（当日消印有効）までの予定である。

### ■都市環境デザイン会議1996年度役員選挙スケジュール（予定）

2月5日（月） 選挙告示

2月23日（金） 立候補届出締切（午後6時）

3月20日頃 投票用紙送付

4月2日（火） 投票締切（当日消印有効）

7月頃 第6回通常総会

### ■候補届出書の様式

#### 代表幹事立候補・推薦候補届出書

（様式1）

○候補者は下記の各欄を明記して下さい。

候補者名	印	生年月日	19 年 月 日 満 歳
所属機関			
住 所	(勤務先) ☐ (自宅) ☐		
所 信			

○推薦候補の場合、推薦者が下欄に記名捺印して下さい。

印	印
---	---

推薦理由 (1名)	
--------------	--

（執筆者氏名： ）

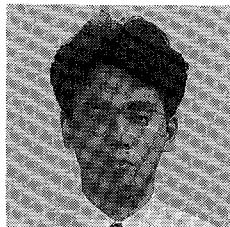
都市環境デザイン会議選挙管理委員会

## ブロック例会レポート

### ■北陸ブロック

横山 裕

YUTAKA YOKOYAMA  
(株)グリーンシグマ



#### 上越フォーラム

##### 1.はじめに

北陸ブロックでは、春の会員相互の発表会、秋の各県持ち回りによるフォーラム開催という2つの活動を中心している。今年の秋のフォーラムは、平成7年11月22日23日の両日、新潟県上越市で開催した。

##### 2.日程・内容

11月22日(水) 13:00~15:30 上越市内視察

1時間30分程度の短時間ではあったが、高田の雁木の街並、直江津の港町、新しいまちづくりが進む春日山の区画整理地区などをバスで回りながら視察。

15:30~17:00 上越市主催まちづくりシンポジュームに参加

コーディネータに渡辺貴介氏(東京工業大学教授)、パネラーに加藤源氏(日本都市総合研究所)、水野一郎氏(金沢工業大学教授)、樋口彦氏(新潟大学教授)を含む6人によって行われた。「市民参加の30万入都市機能の創造を目指して~市民が楽しむまち、人々が訪れるまち~」をテーマに内容の濃いパネルディスカッションを開催。

18:00~交流会

上越市のまちづくり委員、市職員とJUDI会員との交流会。JUDI会員による2次会には、宮越馨氏(上越市長)も参加され、おおいに盛り上がった上越の夜だった。

11月23日(木) 9:00~12:00 都市環境デザイン会議 in 上越

宮越馨市長の挨拶で始まった会議は、「景観づ

くりとまちづくりを考える」というテーマで樋口彦氏をコーディネーターにJUDI会員15人オブザーバー2人、上越市の職員(20代を中心に)20人の計37人で行われた。

最初に上坂達朗氏(東洋設計)から金沢の景観づくりの取組、玉森慶三氏(ライトスタッフ)から福井の宝さがし運動の、2つの話題が紹介された。その後、高橋宏子さん(高田工業高校)と佐藤誠司氏(上越市役所)から問題提起され、議論が進められた。

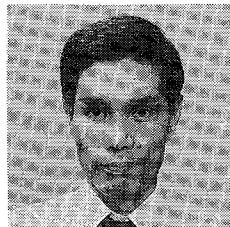
##### 3.振り返ってみて

今回のフォーラムは、上越市に住む高橋宏子さんが、上越のまちづくりに刺激を与える。という所から始まった企画である。上越市では上越市長を先頭に、新しいまちづくりへの取組を始めた所で、まちづくりへの取組に活気溢れている。しかし新しくチャレンジしようとすると、これから何をすべきかわからない。という悩みも生まれるものである。その中で今回の「景観づくりとまちづくりを考える」というテーマが浮かび上がった。なんのために景観づくりをするのか?景観とは何なのか?という市の職員の問題提起による今回の会議は、限られた時間の中で活発な議論が展開できた。しかし十分な結論を見出せたかどうかは、今後の上越のまちづくりを見守る中で判断したいと思っている。また今回の会議は、まちづくりという同じテーマに日々取組ながらもなかなか同じ場所で議論することがなかった市の若手職員と同じテーブルで議論できたことも非常に意義深いものであった。

### ■四国ブロック

林 茂樹

SHIGEKI HAYASHI  
四国ブロック幹事  
林建築事務所



#### 都市環境デザインフォーラム in とくしま

##### 『水遊都市をデザインする』の開催

去る11月18日に徳島市にて全国ブロック幹事会に併せて都市環境デザインフォーラム in とくしま「水遊都市をデザインする」を開催いたしました。

参加者は全国からのJUDI会員のほか一般市民も含めて120名余り。フォーラムに先立ち、街並ウォッキングをおこないましたが、水遊都市という事で徳島市中心部のひょうたん島を1周する船巡りと、市のシンボル眉山にロープウェイで登り山頂から街全体を眺めるという2本立てとしました。

阿波観光ホテルで行われたフォーラムは地元からの話題提供二つを行い、それとウォッキングの感想と併せてのディスカッションとなりました。

最初にフォーラム実行委員でもある徳島市建築指導課の久米将夫さんから、徳島の街の水との関わりの深さや新町川水際公園など市の進めてきた河岸整備事業の実状報告があり、続いて街並みウォッキングでも船上のガイドを務められた新町川を守る会の中村英雄会長から、ボランティアで川の清掃を行って浄化を進めてきたことや水上結婚

式やコンサートといったイベントなどこれまでの守る会の活動報告がありました。

ディスカッションはJUDI代表幹事の榎原和彦大阪産業大学教授のコーディネートにより、JUDI幹事を中心に参加者からは現況の整備に対する感想や問題点、これから水辺空間のあり方について様々な意見が多く出されました。

このフォーラムの詳細については記録集をお送りする予定ですのでそれをご覧下さい。

フォーラム会場には地元協力団体のとくしまアーバンデザイン研究会と阿波のまちなみ研究会の研究をパネル化して周りに沢山並べられました。

これは、開催地が徳島であり、実際に準備運営に関わる事のできる徳島の会員が5名しかいないため、地元の都市デザインに関する団体から委員を募り、15名でフォーラム実行委員会を組織し、準備運営に当たってきたのですが、この機会に各会の研究の一部を参加された全国の会員に披露していただいたものです。

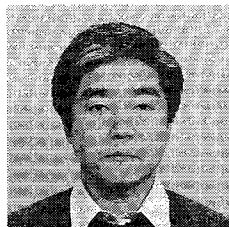
なお前日の17日にはプレ・フォーラムとして、JUDI四国共催で「住民参加型まちづくりを考え

る」のテーマでまちづくり座談会（阿波のまちづくり推進協議会主催）が、勝浦郡上勝町で開催され、JUDIから講師として伊藤洋、長谷川弘直、大谷英人の3氏を派遣していただきました。

今回のフォーラムにお忙しい中参加下さった方々には心から感謝いたします。ありがとうございました。

## ■関東ブロック

中野 恒明  
TSUNEAKI NAKANO  
関東ブロック幹事  
㈱アブル総合計画事務所



### 関東ブロックの動き

関東ブロックでは1994年より関東ブロック会員向けにブロックレターを隔月毎に発行し、昨年12月で12号になりました。

例会、視察会などのブロック活動、その他諸活動は継続しておりますが、途中、運営委員会の出席率も低下するなどの時期を経て、運営委員の増員を図りました。現在、ブロック幹事を含め21人体制となり、毎月ブロック幹事持ち回りで運営委員会を開催しております。

昨秋以降の活動は、10月例会「防災都市とオ-

プンスペース」、11月例会「交通弱者からみた都市空間のデザイン」、12月例会は「交流懇親会」を催してきました。1月27日に「立川の新都心づくり—ファーレ立川」の見学会を行います。4月例会は「デザイン監理」の続編として「都市環境デザインにおける知的所有権」の議論を考えております。弁理士、弁護士の方と調整中です。

5月には隣接ブロックとの交流の第1弾として東北ブロックと共に「白河・棚倉」視察会+シンポジウムを予定しております。追って詳細はニュースに掲載する予定です。

## ■事務局より

### 1. 新会員の紹介

1995年11月1日～12月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

12/31現在の会員数は、475名です。

氏名	勤務先
菰田 朋子	アイエルピー(株)
辻本 智子	(株) 辻本智子環境デザイン研究所
家田 宏	(株) 景観工学研究所
中村豊四郎	アール・イー・アイ(株)
近藤 周司	ケイコン(株)
江田 洋一	住建道路(株)
島津 勝弘	島津環境グラフィックス(有)
池戸 一正	大日コンサルタント(株)

### 2. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容(新)
朝倉 悟	朝倉特許事務所 〒380 長野市早苗町30 北沢ビル3F Tel. & Fax. 026-235-3239
上山 良子	(株) 上山良子ラント・スケープ・デザイン研究所 〒160 新宿区信濃町3 シャトル信濃町301 Tel & Fax は変更なし
菅 孝能	(株) 山手総合計画研究所 〒231 横浜市中区根岸旭台1-1 Tel & Fax は変更なし
福本 康資	退職(連絡は自宅へ)
宮口 恒樹	パシフィックコンサルツ(株) 中部支社 〒451 名古屋市西区牛島町2-5 トミビル Tel. 052-589-3108 Fax. 052-561-6883

## ■編集後記

今回の28号は、他の連載記事やコラム等を暴力的に閉め出し、17ページにも及ぶ座談会を掲載しました。都市デザイン会議設立から5年目の節目で、JUDIの再活性化を図るために、多くの議論を喚起しようと言うのが基本的意図であります。

当デザイン会議のあり方論、各分野との相互交流のあり方、世代間の問題、デザイン手法の問題（川上・川下論）、各ブロックのあり方、今後の活動のあり方等多様な議論がされました。これらの問題に対して、多くの疑問、反論、提案等があると思います。事務局あてに各発言者を指定して意見を募集します。これらを会報に掲載するつもりでおります。

なお、個人的ですが、編集の過程で割愛した、加藤さんから問題提起の「中心市街地の活性化と郊外商業地の問題」について、いくつか特集を組みたいと思っています。（編集委員・櫻井淳）

### JUDIニュース編集委員会

土田 旭	櫻井 淳
沢木 俊岡	菅 孝能
中嶋 猛夫	作山 康
小林 郁雄	清水 泰博
宮前 保子	折田 知子
伊藤 光造	松村みち子